

一、第一回の年報は既に發行され、それには

Höfding, Mejer, Pollock, Brunschvicg, Dunitz-Borkowski,  
Halpern, Wolfson, Gebhardt 諸氏の研究が掲載されてゐる。

## 新著紹介

トレル  
チ著 宗教哲學の主要問題

佐野 勝也譯

「カントに還れ」といふ叫びによりて新しい哲學が生長し始めた。宗教哲學も亦カントに還るべきであつた。然しながらカントに還る事は、何でもカントを超える事ではなればならぬ。カントの自ら試みた宗教哲學は實は其意味を失つてゐる。新しい宗教哲學の進路はカントの宗教哲學をさながらに繼承する事ではなくてカントの批判哲學の根本精神を深く理解して、豊富なる宗教的對象に對し新なる立場を決定するにある。かゝる態度を取つた宗教哲學者の中神學者より出て、最も錚々たるものはトレルチである。

トレルチの宗教學に關する根本思想を窺ふには此書の外 *Widialbrand* Die Philosophie im Beginn des XX. Jahrhunderts I 中に編まれた、*Religionsphilosophie* (1904) 及彼の論文集第二卷に收められた *Das Religiöse Apriori* (1909) 等の論文がある。

彼によれば學としての宗教學は神學宗教史より始めて宗教心理

學宗教認識論宗教歴史哲學を含む體系である。此中宗教學の中心問題となすものは宗教心理學と宗教認識論である。就中中核となすものは宗教認識論である。宗教心理學と宗教認識論との關係を特に問題として取扱つたものがその原名の示す如く此書である。だから小冊子ではあるが、彼の根本思想を見る爲には一般に此書が用ひられてゐる。

凡て公然なる綜合は嚴密なる區別を豫想する。區別は綜合の爲めであり、一先づ嚴密に區別する事によりて綜合が必然となる。凡て學問には不徹底と混雜が一番悪い。彼は本書に於てセームスの「宗教的體驗の種々」の批評より始めてゐる、彼は該書に於て本質的に純粹經驗的なる宗教心理學的著作を見た。此書が經驗的宗教心理學として純粹であり徹底的である丈け、それ丈け、然し乍ら、明に宗教心理學の限界を示してゐる。宗教心理學の限界とは宗教の眞理内容及び妥當に關する問題である。かゝる心理學にせりての限界問題を解決するものは、宗教認識論である。カントによりて最も明に提唱せられた、新謂形式的合理主義に於て眞によく、その限界を守り宗教心理學と相悖る處なき認識論を認めた。かくて我々はセームスよりカントへ還り行かればならぬ。彼はカントの認識論を四項に分つて是正して以て自己の思想を述べてゐる。

要するに、現實なる宗教は神秘的體驗の中に於て合理的法則が非合理的具體的個別的心的事實と結合する事に於て完成する從て宗教の學としての宗教學は宗教の心理的現象の特殊性を捉へる事を任務とする宗教心理學と宗教意識中の先天的合理的要素を探索

しその意識の全體系に於ける地位を明にし以て宗教の眞理性妥當性の問題を解決しやうとする宗教認識論との完全なる綜合でなければならぬ。宗教心理學は宗教認識論にまじりての門口であり、宗教認識論は宗教心理學によりて絶えず興奮せざる限り行く、「かくの如くにして心理學と認識論經驗論と合理論とが各自の權利を認めらるゝとさき始めて宗教學は宗教に關する學となり、學に依て宗教を代用せしめるものでもなく宗教に反對する學でもなく或は單に宗教を叙述するものでもなくなる」、然して又「宗教生活を批評し之を規則立て、之れを自己のうちに深め發展させることを保證する」宗教學が成立する。

以上トレルチの方法論的思想は大體に於て承認せらるべきであらう、然しワオバミンも云つてゐる様に、宗教心理學を基礎とする認識論の成立は、要求としては何如にも正當であるが、併しそれは要求に止る。もし我々は、然らば如何にして此の要求を爲し送けるかといふ問題になれば種々なる困難が起つて来る。又彼は非合理性を承認する。併し純粹非合理的心理學的なものゝ誤謬又は假象と呼ぶのは何如であらうか。カント已に道破してゐる様に誤謬といふも已に先天形式的基礎に依存する、單なる非合理性は誤謬でも假象でもない。従つて現實なる宗教生活は合理性と非合理性の戰によりて成立するのではなくて融合によりてこそ成立するのであらう。

著書の紹介批評としては自分は餘りに多くを内容紹介に費して仕舞た。而も肝心の譯文に就ては、不幸原著参照の機會を得なかつた。此點譯者に對して寛恕を乞ふ次第である。ともあれ可成に

讀み難い原文をこれだけに譯し上げた譯者の努力と心遣ひは翻譯の經驗のない我身にも同感する事が出来る、それに譯者は懇切にも現代宗教思想を觀る爲の重要な参照書目及カント研究用書目を追加補充してなされる、是等は更に進んで研究せんとする人々にさつて大きな便宜を興へる。自分は小さなものではあるが現代宗教思想史上に於て見逃すべからざる位置を占めてゐる、此書が有名な譯者を得た事を喜ぶのである。東京大村書店發行（佐保田鶴治）

### 批判的教育學の問題

篠原 助市著

學としての教育研究が表はれてから約百年、其間讀書の選擇に可なり腦を絞られならぬ程に澤山に研究が發表された。けれども其多くは價値を無みする自然科學的研究が根底曖昧なる獨斷かである。眞に我々をして首肯せしむるに足るものとは獨逸で出版された二三種にすぎない、それでも未だ理想とは云へない、實驗的事實を多數に網羅したものは教育の實際家に取つては至極重要に見ゆるも其根本問題に觸れざるを以て齟齬點睛を失するの怨みあり、廣汎なる哲學的背景を以て組織されたものは安住地を得たる感を起さしむるも實際家に取つては縁遠き失あり。兩者を兼備したものの出現を望む事可なり久しき間であつた。

著者は嘗て小學校長たり、高等師範を卒業して師範附屬小學の主事たり、其間に師範學校用教科書教育史、心理學、論理等の著あり、後京都大學にて哲學を修め、卒業後大學院に入りて勉學を續けらるゝ、事三年、後東京高師教授となり、今は某大學の教授